

Attemptの補部に見る通時的な変化について

A Study of the Diachronic Changes in the Complement
to the Verb “*Attempt*”

遠 峯 伸一郎

TOMINE Shin-ichiro

Attemptの補部に見る通時的な変化について

A Study of the Diachronic Changes in the Complement to the Verb "Attempt"

遠 峯 伸一郎

TOMINE, Shin-ichiro

キーワード：英語史, attempt, 補部, 意味変化, 統語変化

1. はじめに

Green (1974:54-55) は、現代英語（以下PE）¹においてattemptはtryと意味が類似し、統語的な振る舞いが類似していると指摘している。まず、両者ともその補部にto不定詞や事象名詞を取ることができる。

- (1) a. John tried *to touch his toes*.²
b. John attempted *to touch his toes*. [ibid.]
- (2) a. John tried *a flight to Cuba*.
b. John attempted *a flight to Cuba*. [ibid.]

また、両者ともto不定詞補部のto不定詞を省略したと考えられる他動詞用法を持つ。

- (3) a. John tried *the lock*.
b. John attempted *the lock*. [ibid.]

(3a, b)はthe lockの前にto openが補われて解される。

(1)~(3)に見るように、意味的に類似したtryとattemptには統語的な振る舞いに共通点があるが、両者の間には相違点もある。まず、(3)の用法においてattemptでは有生目的語を残すことはできない。

¹ 本論文では、1100年から1500年までの英語を中英語（以下ME）、1500年から1900年までの英語を近代英語（以下ModE）、1900年以降の英語をPEとする。

² イタリクスは筆者による。以下も特に断りがない限り同じ。

- (4) a. I'll attempt to persuade the chairman, and you can *try the dean*.
b. *I'll attempt to persuade the chairman, and you can *attempt the dean*.
c. *I'll try to persuade the chairman, and you can *attempt the dean*.
d. I'll try to persuade the chairman, and you can *try the dean*. [ibid.]

また補部を完全に省略することができるか否かでも違いが見られる。

- (5) a. Can you do it? I can *try*.
b. Can you do it? *I can *attempt*.³ [ibid.]

(5a,b)ではtry, attemptの補部to do itが先行文脈に依存して省略されている。両者の文法性の違いに示されるように、このような省略はtryでは可能だが、attemptでは不可能である。

以上に見る通り、PEのtryとattemptは意味が類似しているものの統語的振る舞いに違いがある。Green (ibid.) は、attemptの(3)の用法における歴史的な変化を検討し、この違いがattemptの意味変化に起因すると示唆している。次に見るように、attemptはかつてtryと同様に(3)の用法で有生名詞目的語を残すことができた。

- (6) I have *attempted*, one by one, *the lords* ... With supplication prone and father's tears, To accept of ransom for my son. (1671) [Green (1974:65)]

(6)は、その文意から、attemptedとその目的語the lordsの間にto persuadeが省略されていると考えられる。PEでは(4b, c)に見るようにこの用法において有生名詞を残す省略は不可能である。PEにおいてこの用法が失われた原因について、Green (ibid.) はattemptから「影響を与える」の意味が失われたためとしている。

- (7) *His Highness should not be attempted to recede from the Religion.* (a1670 Hacket *Abp. Williams* i. (1693) 119) [OED]

(7)ではattemptがPEでは廃れた「影響を与える」という意味で使われている (*The Oxford English Dictionary* (以下OED), s.v. attempt, II)。この意味ではattemptは有生の目的語を取った。Attemptにおいて、「影響を与える」の意味が失われたことと、(4)のような省略が不可能になったことが、(7)のような有生の目的語を取る用法を不可能にしたとGreen (ibid.:66) は主張する。

このように、Greenは、attemptが有生の目的語を取らなくなり、to不定詞が省略されたと考え

³ (5b)は、attemptの後にtoを残せば文法的である。

られる用法を容認しなくなった原因を意味の変化に求めている。本論文では、Greenに従って統語的性質は意味が決定すると仮定し、(5b)のように、PEで補部を完全に省略することを容認しない現象について、その原因となる意味的性質を探る。次の例を見られたい。ModEでは、PEで不可能な補部を完全に省略する現象が見られた。

(8) The Chymists have *attempted* laudably, reducing their causes unto Sal, Sulphur, and Mercury. (1646 Sir T. Browne *Pseud. Ep.* vi. x. 322)⁴ [OED]

(8)ではattemptの補部としてto find their causesが先行文脈から補われる。⁵この用法がModEで可能であり、PEで不可能な理由は何であろうか。

本論文では、まずこの疑問に答えるために必要な言語事実を収集する。具体的には、OED、MEDの全文検索⁶を行い、attemptに見られる通時的な変化を調査する。そしてPEにおけるattemptの補部を完全に省略する現象が17世紀中に失われたことを指摘する。さらに、そのほぼ同時期に「影響を与える」の意味が消失していることに着目し、attemptが「しようとする」という労苦の意味に限定されたことが補部を完全に省略する用法の消失を招いたと主張する。

本論文の構成は以下の通りである。第2節ではMED、OEDの全文検索から得られた事実を提示し、それらを観察する。第3節では、第2節で提示した資料にもとづいて、attemptの補部を完全に省略する用法が17世紀中に失われたことを指摘する。そして、その理由はattemptが「影響を与える」の意味を失い、「しようとする」の意味だけに限定されたことであると主張する。第4節は本論文のまとめと今後の課題を示す。

⁴ OED, *Middle English Dictionary* (以下MED)からの用例の出典についてはそれぞれの書式を踏襲した。

⁵ (8)に先行する文脈は次の通りである。下記引用中の“set down their incontrollable causes”が(8)のattemptedの補部に補われて解される。

(i) Thus of colours in general, .. no man hath yet beheld the true nature; or positively *set down their incontrollable causes*. Which while some ascribe unto the mixture of the Elements, others to the graduality of light, and by darkness almost to discover that whose existence is evidenced by Light.

なお(8)は、版によっては“The Chymists have laudably reduced their causes unto Sal, Sulphur, and Mercury”となっている。

⁶ OEDはCD-ROM版および検索ソフトVersion1.14 (1994)を使用した。MEDはウェブ版(<http://quod.lib.umich.edu/m/med/>)を利用した。いずれも異綴り形をすべて検索対象とした。

2. 事実

本論文で収集したデータを構文と時期ごとに分類して次の表に示す。

表 1 : MED, OEDにおける動詞attemptを含む例文⁷

取る要素 年代	他動詞用法			自動詞用法			計
	+名詞句 ⁸	+名詞句+to不定詞 ⁹	+動名詞	+to不定詞	+ ϕ ¹⁰	+前置詞句	
1351-1400	3 (0)	0	0	0	1	0	4
1401-1450	15 (2)	0	0	9	0	3	27
1451-1500	21 (0)	0	0	1	0	0	22
1501-1550	18 (3)	0	0	2	0	0	20
1551-1600	39 (4)	1	0	26	0	0	66
1601-1650	47 (8)	0	0	22	3	4	76
1651-1700	40 (8)	1	0	30	1	6	78
1701-1750	35 (3)	0	2	28	0	2	67
1751-1800	37 (0)	1	5	70	0	1	114
1801-1850	58 (0)	0	5	134	0	0	197
1851-1900	100 (1)	0	3	175	1	1	280
計	413 (29)	3	15	497	6	17	951

例の総数は年代ごとに異なる。各用法の盛衰を明らかにするため、表 1 の資料を 100 例ごとの頻度に換算して表 2 に示す。

⁷ 次のように主節とto不定詞が両方とも受動態になっている例は本論の考察対象から外した。

(i) Thus a perfect equality of the white and colored races *is attempted to be fixed* by Federal law in every State of the Union over the vast field of State jurisdiction covered by these enumerated rights. (1866 A. Johnson *Speech* 27 Mar. in H. S. Commager *Documents Amer. Hist.* (1935) II. 16/2) [OED]

⁸ かっこ内の数字は目的語が有生名詞である例の数を示す。

⁹ 目的語が再帰代名詞になっている例は除外した。

(i) Even before it could be done in due form, the chiefs of the nation did not *attempt themselves to exercise* authority so much as by interim. (1791 Burke *Let. Memb. Nat. Assembly Wks.* VI. 46) [OED]

(i)は「+名詞句+to不定詞」の例ではなく、「+to不定詞」の一種と見なすべきであろう。

¹⁰ 便宜上、補部を完全に省略したと考えられる例を自動詞用法とした。

表 2：100 例ごとの例の数¹¹

取る要素 年代	他動詞用法			自動詞用法		
	+名詞句 ¹²	+名詞句+to不定詞	+動名詞	+to不定詞	+ ϕ ¹³	+前置詞句
1351-1400	75 (0)	0	0	0	25	0
1401-1450	55.5 (7.4)	0	0	33.3	0	11.1
1451-1500	95.4 (0)	0	0	4.5	0	0
1501-1550	90 (15)	0	0	10	0	0
1551-1600	59 (6.0)	1.5	0	39.3	0	0
1601-1650	61.8 (10.5)	0	0	28.9	3.9	5.2
1651-1700	51.2 (10.2)	1.2	0	38.4	1.2	7.6
1701-1750	52.2 (4.0)	0	2.9	41.7	0	2.9
1751-1800	32.4 (0)	0.8	4.3	61.4	0	0.8
1801-1850	29.4 (0)	0	2.5	68	0	0
1851-1900	35.7 (0.3)	0	1	62.5	0.3	0.3

表 1, 2 を見ると, attemptは英語に現れたME以降PEに至るまで他動詞用法と自動詞用法を持っていることが分かる。いずれの用法でも無生物主語の例は見られず, またPEに至るまでの間に他動詞用法が減少し, 自動詞用法, 特にto不定詞を従える用法が増加する傾向があることが明らかである。以下で各用法を観察する。

他動詞用法ではいずれの年代でも(9)のような名詞句目的語を取る用法が例の大多数を占める。

(9) Multitudes of Chymists have .. attempted in Vain the Volatilization of the Salt of Tartar. (1661 Boyle *Scept. Chem.* vi. (1680) 420) [OED]

名詞句目的語は, (9)にあるような無生物名詞¹⁴と(10)に見るような有生名詞がある。

(10) a. How I should escape from them, if they attempted me. (1719 De Foe *Crusoe* (1858) 207) [OED]

b. They attempted us, as the Devil did Adam. (1691 Norris *Pract. Disc.* 26) [OED]

(10a)では, 目的語meは動詞attemptの表す動作の対象を示す被動目的語であり, 動詞attemptは「攻撃する」の意味に解される。(10b)の有生代名詞usは, (10a)のmeと同じくattemptの表す動作の対象を表し, attemptは「誘惑する」の意味で解される。このようにattemptが被動目的語を取る例は,

¹¹ 小数点 2 位以下は切り捨てた。

¹² カッコ内の数字は有生名詞を目的語にする例の比率である。

¹³ 注10を参照。

¹⁴ 事象名詞を含む。以下同じ。

19 世紀後半の孤例を除いては、16~17 世紀を中心にして 15 世紀から 18 世紀前半に分布する。また、無生物名詞を目的語に取る用法は 14 世紀以降 PE まで見られる。

名詞句目的語を取る用法以外では、動名詞を取る用法と「名詞句+to 不定詞」を取る用法が見られる。

(11) This spurt should be continued till the boat begins to rock, when it is better to 'ease all' than to *attempt altering* the stroke into a milder one. (1863 *Rowing & Sailing* 55) [OED]

(7) *His Highness should not be attempted to recede* from the Religion.

(11)では、動名詞は動詞attemptの表す労苦の動作の目的を表し、(7)の「名詞句+to 不定詞」を取る用法では、attemptは「影響を与える」の意味を持つ。しかし、(7)の用法は表 1, 2 に見るよう調査対象とした全期間を通して 3 例しかない。したがって、これは確立した用法ではなく、(10)のような有生名詞目的語を取る用法の一種であり、そのto 不定詞は目的を表す随機的要素であると考えられる。

続いて自動詞用法を見る。自動詞用法の大半を占めるのはto 不定詞を取る用法である。

(12) The wild elephant, upon seeing himself entrapped in this manner, instantly *attempts to use* violence. (1774 Goldsm. *Nat. Hist.* (1776) IV. 272) [OED]

ここではto 不定詞は労苦の目的の意味を担う。この用法は 15 世紀から PE まで例が見られる。

Attemptはかつて補部を一切取らない用法もあった。

(8) The Chymists have *attempted* laudably, reducing their causes unto Sal, Sulphur, and Mercury.

第 1 節で述べたように、(8)においては、労苦の目的として文脈からto find their causesが補われる。この用法は、19 世紀後半に見られる孤例を除いて、14 世紀から 17 世紀まで観察される。

これら以外には前置詞句を取る例が見られる。¹⁵

(13) What will not men *attempt for* sacred praise? (1728 Young *Love Fame* i. 50) [OED]

(13) のforが導く前置詞句は労苦の目的を表す。このような例は 18 世紀と 19 世紀にそれぞれ 1

15 次の例では、一見してattemptがaboveで導かれる前置詞句を導いている。

(i) Lyg. I know you dare lie. Bes. With none but Summer Whores ..., my means and manners never could *attempt above* a hedge or haycock. (1611 Beaum. & Fl. *King & No K.* v. i) [OED]

ここではattemptとaboveの間にto goが省略されていると考えられる。この種類の省略は本論の考察対象外とした。

例ずつ観察される。For以外ではagainst, on, uponが導く前置詞句を取る例が、18世紀後半の孤例を除いて、15世紀から17世紀に見られる。これらの前置詞句の目的語名詞句は動詞attemptの表す動作から影響を受ける対象を表す。

(14) I did not think advisable to *attempt upon* the Enemy, lying as he doth. (1650 Cromwell *Lett. & Sp.* (Carl.) Let. 87)¹⁶ [OED]

上述の通り、attemptの他動詞用法で被動目的語を取る用法は18世紀前半に廃れており、自動詞用法でagainst, on, uponを伴って被動目的語を取る用法もほぼ同時期の17世紀を最後に例がほぼ消失する。これらの事実からattemptの「影響を与える」の意味は18世紀前半に消失したと考えられる。

本節における観察をまとめる。Attemptはその歴史の最初期から他動詞用法と自動詞用法を持っており、PEに至るまでの間に他動詞用法が減少し、自動詞用法が増加している。自動詞用法の中でも特にto不定詞を取る用法が顕著に増加する傾向が認められる。他動詞用法の名詞句目的語を取る用法では、目的語は無生物名詞と有生名詞があり、両者の担う意味は異なる。前者は動詞attemptの表す労苦の目的を表すが、後者は動詞attemptの動作の対象を表す被動目的語である。後者の用法は18世紀前半に廃れた。これら以外の他動詞用法としては、「名詞句+to不定詞」を取る用法が16世紀から18世紀まで見られた。ただし、この用法は頻度が極めて低く、被動目的語を取る用法の変種に過ぎないと思われる。

自動詞用法ではto不定詞を取る用法、および補部を全く省略したと見られる用法、前置詞句を取る用法が見られる。To不定詞を取る用法は15世紀以降PEに至るまで例が見られる。補部を全く省略する用法は、19世紀後半の孤例を除いて14世紀から17世紀まで例が見られ、18世紀以降廃れた。前置詞句を取る用法では、for, against, on, uponに導かれた前置詞句が観察される。Forで導かれた前置詞句の目的語名詞句は労苦の目的を表し、against, on, uponで導かれた前置詞句の目的語名詞句は動詞attemptの動作の対象を表す。前者は18, 19世紀に各1例ずつ観察され、後者は18世紀後半の孤例を除いては、17世紀まで例が観察される。被動目的語を取る他動詞用法とagainst, on, uponに導かれた前置詞句を取る自動詞用法の消失時期を考慮すると、attemptの「影響を与える」の意味は18世紀前半には廃れたと考えられる。

3. 考察

第1節で見たとおり、attemptはPEにおいて補部を完全に省略する用法を容認しない。

¹⁶ (14)では、attemptは「攻撃する」の意味に解される。

(5) a. Can you do it? I can *try*.

b. Can you do it? *I can *attempt*.

(8) The Chymists have *attempted* laudably, reducing their causes unto Sal, Sulphur, and Mercury.

(5a, b)から分かるように、*try*においては補部*to do it*を先行文脈に依存して省略することは可能だが、*attempt*においては不可能である。この制約はいつ生じたのだろうか、そしてその背後にはどのような意味変化があるのだろうか。以下でこれらの疑問の解決を試みる。

第2節で見たとおり、*attempt*の補部を完全に省略する用法は17世紀中に消失したと考えられる。そのほぼ同時期、18世紀前半までに*attempt*の「影響を与える」の意味が失われている。この意味変化が補部を完全に省略する用法とほぼ同時期であることから、本論文では「影響を与える」の意味が消失したことで補部を取らない自動詞用法が失われたと主張する。では、そこにはどのようなメカニズムが存在したのだろうか。

がんらい*attempt*は、「影響を与える」という意味と「しようとする」という労苦の意味を持った。歴史の中でおそらく多義を避ける圧力が働き、ModEで前者の意味が廃れた。この変化に伴い、*attempt*は労苦の目的を表す要素を補部として取るようになったと考えられる。つまり、労苦の目的を表す要素が必須になったために、補部を全く省略することができなくなったのである。「影響を与える」という意味と労苦の意味が併存した間は、意味によって補部の統語的な形式が使い分けられており、さまざまな形式が容認されていたが、労苦の意味しか持たなくなると、それに従い容認される補部の形式も1つになったのである。

4. 結語

動詞*attempt*は、PEでは補部の完全な省略を認めないが、ModEにおいてはそれが可能であった。本論文ではこの通時的な変化に対して、「影響を与える」という被動目的語を取る意味の消失が原因であるとの説明を与えた。*Attempt*は、英語に現れた当初から17世紀までは、労苦の動詞の用法と被動目的語を取る用法が併存し、補部の形式によって両者の意味を使い分けた。しかし、18世紀後半以降は労苦の意味に限定され、その目的を表す要素が補部として必須要素となり、補部を取らない用法が不可能になったのである。

本論文を結ぶにあたり、今後の課題を2つ挙げる。本論文では、*attempt*の補部に見られる変化について意味的な観点から説明を試みたが、ここで試みられた説明は*attempt*の事実のみに基づいたものであり、一般的に成り立つものであるかどうかは他の意味的に類似した動詞の資料も検討しなくてはならない。また、労苦の動詞は語彙的な意味が比較的希薄であり、助動詞*will*に近似していると考えられることから、本論文で提示した事実は通時的な助動詞化の観点からも分析が必要であろう。

参考文献

- Green, G. (1974) *Semantics and Syntactic Regularity*, Indiana University Press, Bloomington.
- Kurath, H., et al. (1952–) *Middle English Dictionary*, University of Michigan Press, Ann Arbor. (<http://quod.lib.umich.edu/m/med>)
- Simpson, J. A. and E. S. C. Weiner (1989) *The Oxford English Dictionary*, 2nd. ed., on CD-ROM Version1.14 (1994), Clarendon Press, Oxford.

